

落語のラジオドラマ化

— その構成と話法

和田尚久*

はじめに

明星大学人文学部日本文化学科の「研究紀要第二十一号」に、落語のラジオドラマ化——その実践と方法」と題する論考を寄稿した。私が執筆したラジオドラマの台本（四本）と創作ノートを併せた内容である。本稿はその〈続編〉にあたる。昨年から本年にかけて執筆・放送したラジオドラマ台本をここに掲載し、ドラマの構成、ことに〈語りの方〈法〉〉について考えてみようと思う。

二〇十三年二月から二〇十四年年十月にかけて、文化放送の委嘱によりラジオドラマ台本十四本を執筆した。番組は『青山二丁目劇場』。毎週月曜日（二〇時三〇分〜二一時）に放送されている、いまでは数少な

くなったラジオドラマ番組である。

記録として執筆作品一覧を記しておこう。

『流水の秘密』オリジナルドラマ 十三年二月二十五日放送

『愛の妙薬』（ドニゼッティ『愛の妙薬』より）十三年四月一五日放送

『お尋ね者』（小山内薫原作『息子』より）十三年四月二九日放送

『ホタルコンシェルジュ』オリジナルドラマ 十三年六月一七日

『牡丹灯籠 真夜中のヒロイン』（三遊亭圓朝『怪談牡丹燈籠』より）

十三年八月一九日放送

『オー・ヘンリー 夏の夜のエチュード』（オー・ヘンリー『人生は芝

居だ』より）十三年八月二六日放送

『町の底を流れるのは』オリジナルドラマ 十三年十一月一日放送

『親子酒』（古典落語『親子酒』より）十四年一月六日放送

『夢の酒』（古典落語『夢の酒』より）十四年一月六日放送 ※二本立

『御神酒徳利 苦しまぎれの猫占い』（古典落語『御神酒徳利』より）

十四年一月一三日放送

『ゴーストライター』オリジナルドラマ 十四年三月二四日放送

『春の夜の時計店』（ブッチーニ『外套』より）十四年三月三一日放送

『私の独立記念日』オリジナルドラマ 十四年六月二四日放送

『もう半分』（古典落語『もう半分』より）十四年九月二九日放送

題材はさまざまで、オリジナルドラマあり、小説の脚色あり、オペラのパロディも二本ある。

本稿ではそのうち、落語を下敷きにした台本三本を扱う。

落語家による〈ひとりの語り芸〉である「落語」を、〈近代劇〉のバ

リエーションである。「ラジオドラマ」(放送劇)に書き換えたとき、どのような相違と特徴が現前するのか。台本そのものを公開するとともに、ストーリーの構成や語りの方方法に関して意図したところをつまびらかにし、具体的に考察するのが本稿の趣旨である。

以下、各作品の台本を掲載し、創作ノートを付記する。

二〇一四年一月十三日放送

(登場人物)

- ・おはや (江戸の旅館の女中) (18歳)
- ・善八 (大阪・鴻池家の番頭) (45歳) ※上方弁
- ・巴屋主人 (三島の宿場。旅館巴屋の主人) (50代)
- ・おみつ (巴屋の奉公人・田舎訛り・朴訥) (17歳)
- ・大神宮様 (神様) 年齢ナシ
- ・箱入り娘 (大坂鴻池家の娘) (10代)
- ・猫のゴンタ (SEではなく、生声が望ましい) オス猫

※SE＝効果音

○シーン1 東海道・三島の宿 の宿屋

SE 東海道の雑踏……

善八 「さあ、先生、今日はぜひぶんと歩かせてしまっ、すんま

へんなあ。

あそこに見えるのが、今晚、お部屋を取りました三島の宿
でいちばんの宿屋。巴屋でございます。

また、明日もあることやさかい、今日はどうぞ、ゆっくり

御休息を」

おはや 「わぁ〜ずいぶん立派な門構えの宿屋さんですね。

……私は普通のところでは十分なんですけど……」

善八

「とんでもない。鴻池の番頭、この善八が先生を安い旅籠に案内したなんてことが知れましたら主人に叱られますよって。この店は去年出た評判記で三つ星がついております。それから、明日からは御駕籠を用意いたします。駕籠でいけば、大坂にもはよ、着きますさかい」

おはや

「はあ、駕籠ですか。そんなもの、乗ったこと無いですよ。……それに、その先生って呼び方も、どーも、くすぐったいんですけど。私は、馬喰町の旅籠、狩豆屋吾兵衛の女中名前、はや。いつもはおはやと呼ばれてます」

善八

「そのおはやさんが、実は占いの名人……いやあちょっと知りませんでした。ですから、やっぱり先生と呼ばせていただきます」

おはや

「はあ………(ため息)」

善八

「(宿屋の衆に)」

おお、若い衆がそろって出迎えおおきに。話はとどいていると思うけど、大坂の「鴻池」で二人。まず、先生が二階のかどの上部屋。わしは、ま、並でええわ。それから、先生と一緒に猫が一匹。そや。猫も先生と一緒に休みなさるんや。物置小屋？ そらあかん。猫も大事なお客様。払いはちゃんとするさかいに、上々の扱いをたのんまっせ。

それから料理やけどな……」

おはや

あの一……。

青山二丁目劇場をお聴きのみなさま。

正直言って、わたし、困惑しています。

わたくし、もともと江戸は日本橋馬喰町にあります、狩豆屋吾兵衛という旅籠の女中で、「はや」と言います。

いつもは、店のなかのお掃除をしたり、買い出しをしたり、あるいは台所仕事をしたり……と、いわゆる女中の仕事をしています。

占いなんか、ゼーんぜんっ、なんにも出来ないんです。

では！ なんて善八さんが私のことを占いの先生なんて呼んでるかと言いますと。じつは、いまから三日前に、こんな事件があったのでございます……。

○シーン2 三日前。日本橋 狩豆屋吾兵衛

※ この場面はおはやの一人語り。

落語のように進行する。

SE 店の中のガヤガヤ……

その日。わたしたちの店は、一年に一度の大掃除の日でございました。店の者一同でフスマや障子を貼り替えたり、すす払いをしたり、畳をあげたり神棚を掃除したりと、それはそれは大変なさわざです。

私は台所の掃除をしていたのですが、そのとき、床に置いてあったのが、一對の御神酒徳利。

そう、二つで一揃いになっている、特別な徳利のことです。

しかも。この御神酒徳利。なんと狩豆屋のご先祖様が徳川將軍から拝領したというゆかりの逸品で、全体は銀のつくり。胴の真ん中には「葵の御紋」が入っています。

ははぁー……（平伏の思い入れ）。

いつもは神棚にお供えをしてあるのですが、大掃除の日。だれかが床に置いていったのでしょう。

このまま、踏んづけられたり、どこかに紛れてしまったりは大変！ と思った私は、御神酒徳利を、いつも使っている大きな水瓶の中へ……

SE ドブン ドブドブドブ……

「よし、これで大丈夫」

水瓶の中をわざわざかきまわす人なんていませんし、人目にもつきません。大掃除が終わったあと、よく清めて、神棚に戻そうと思ったのであります。

掃除がおおかた片付いたのは、暮れ六つも過ぎた頃だったでしょう。みんなでお茶を飲んだり、お饅頭を食べたりして一休みしていたのですが、突然、そこに響いたのがご主人様の金切り声でした。

主人「ない。ない。ない。御神酒徳利がないぞ！」

ご主人様が家宝として受け継ぎ、いつも手を合わせている御神酒徳利が見あたらないというのです。

はい、その御神酒徳利なら、水瓶の中にあります。

しかし、そのときの私は、掃除の忙しさで、自分が徳利を水瓶に沈めたことをすっかり忘れていたのです！

SE 店の者のザワザワ。（不安な様子）

それからは、ご主人様はもとより、店の者みなで、御神酒徳利の行方を家捜し。

しかし、どこを探しても、御神酒徳利は出てきません。

主人「家宝の品を、ちゃんとしまっておかなかったのは、私の責

任。はい。みなさん、今日はもう休んでください。

あとは私が探すことにします。どうぞ部屋に下がって下さい」

がっくりと肩を落としたご主人様はそう言いますと、店者を気遣って、詮議を打ち切りました。

私は寝起きをしている三畳間に戻ると、しばらくボンヤリとしていました。

そして……

「いけない！ 徳利ってあの徳利。水瓶の中に入れたのは！ まずい！ やば！ あの、あの！」

いまずぐ水瓶から徳利だそうと、台所へ戻った私。

ところが、店先では、ご主人様や男の人たちが、まだ徳利を探しています。

SE 店の者のザワザワ。(みなで捜し物)

「この雰囲気……とても言い出せないよ……」

店にただようシリアスな雰囲気に呑まれてしまったこの私。とても自分が隠したとは言い出せず、呆然としておりました……。

主人「おはや。どうした？ ぼんやりして。何かあったのか？」

ご主人様に声をかけられた私は、そこで、とんでもないことを口走ったのです。

「あ……あの、私、猫占いを少々たしなんでおりました。

あの……それで占ってみようかなあって」

猫占い！

なんででしょうか、それは？

自分でもわかりません。

主人「猫占い？……今日はもう探すのはやめにしようかと思っていたのだが。うむ……まあ見つからなくて、もともとか……それじゃあ、ひとつ占って見てくれるか」

ご主人様も呆然としていたのでしょう。

それで占ってみよと言うのです。

私はあわてて、飼い猫のゴンタをだっこすると、ついでに店のソロバンを手にして、ご主人様のまえに正座しました。

「オホン。これは私の故郷に伝わる伝統の占いです。

みなさま、どうぞお静かにお願いいたします」

それからは、もう滅茶苦茶。

猫をかさまにしたり、ソロバンをかき鳴らしたり……

SE 猫の悲鳴 ソロバンをシャッフルする音。

主人「それで、なにかわかるのか……??」

私を不安そうに見るご主人様。

不安なのはこっちです！

私は腹を据えると、

「出ました。御神酒徳利は、家のなかの辰巳の方角。それも水に関係した場所にあります。そう……水の中にアリマス」

主人「辰巳の方角……だとすると……台所か」

ご主人様をはじめとして、男の人たちは、あやしみながらも台所のほうを調べに行きました。

しばらくすると、

主人「あった、水瓶の中に徳利があったぞ！ 有り難い。

これでご先祖様に申し訳がたつ！ あった！ あった！」

SE 一同（よかつた、やれやれ……等）

はい。当然です。あるところにあつた、わけです。めでたし、めでたし。

主人「今日はこのまま宴会にしよう。」

店の者も、このまま一杯やってくれ。振る舞い酒だ」

大喜びのご主人様はそういうと、樽酒の封を切り、店の者に振る舞うという浮かれようです……。

さて。このさわぎの一部始終をみておりましたが、大坂の豪商、鴻池様の番頭さんで善八さん。

この善八さんは、うちのご主人様と仲良しで、江戸においでになるときは、狩豆屋を定宿にしてくださいます。本来、お客様はお泊めしない日なのですが、いつものよしみで、特別にお部屋をとっていたというわけですよ。

善八

「こりゃめずらしい。わしも長いこと世間を渡ってきたけど、猫占いちゅうもんは、はじめて拝見させていただきました。

しかも、よう当たる。見事なもんや。

狩豆屋さん。ぶしつけなお願いですんまへんけど、こちらのおはやさんをふた月……いやひと月、鴻池にお貸ししてはいただけまへんか。この善八、頭を下げます……」

ご主人様が話を聞いてみますと……大坂にあります鴻池様のご本家で、箱入り娘の「おしず」様が、一ヶ月前から原因不明の病になり、ずっと床とこにいたままだというのです。もちろん、高名なお医者様や漢方の先生を呼んで診て貰ったのですが、みな、首をかしげるばかり……。

お医者様でも治せないのなら、お祓いや占いで悪病退散を

善八

するしかない！ ということになり、いま鴻池さんは、占いや祈禱師の名人を必死になってさがしていると言っています。「……そういうわけでございます。

勝手なことを言うてることは、重々承知です。

しかし、いま、鴻池の家では、お嬢様に元気になってもらうことが一番の大事。

番頭としてのカンで申します。おはやさんに占ってもらえば、きっと良い解決法が見つかると思います。もちろん、おはやさん……いや、おはや先生をお借りするあいだ、それ相応のお礼はさせてもらいます。おはやさんにもちゃんとした給金をお支払いします。なんと、この善八の顔を立ててはくれませんか」

善八さんの話を聞いたご主人様は、その熱意にほだされ

主人「わかりました。おはやが役に立つかどうかはわかりませんが、あなたを信用して、お貸しいたします」

と重々しく返事をしたのであります。

ちよっとお!!

私の意志は?! っていうか、猫占いなんてホントに信じてます? という内心の声はもちろん届かず、翌朝、善八さんと私、それに猫のゴンタは大坂を目指して東海道を西へ西へ……。

とんだ珍道中がはじまったというわけですよ……。

○シーン3 もとの三島の宿「巴屋」の二階座敷

善八

「(お酒を注いで)ささ、先生、一杯いきまひよ」

おはや 「あのー。私、お酒のめないですよ……」

善八 「はい、そう思いました、これは上物の甘酒です。ま、形だけでも一杯」

おはや 「そうですか、では、一杯だけ」

善八 「はい」

SE ニャー……(僕には?)

善八 「はい、ゴンタ様には、上物の鯉節とシラス御飯。おかわりもご自由にどうぞ」

SE ニャー!! (嬉しい)

善八 「ところで、先生はいつたいでこで猫占いを身につけられたのですか?」

おはや 「(むせて) まあ……あの……私の田舎に猫八幡様ねこはちまんという神社がありまして、そこで、あの毎年、秋に猫祭りっていうのがあるんですね。その神社にずーっとお仕えしている御巫女さんがいます。そのひとが、私の母の従兄弟の、お姉さんで、それで……(シドロモドロ)」

善八 「へえ……で、猫占いにはソロバンが付き物なんですか?」

おはや 「(出鱈目に) そうなんです。なんでも、あのソロバンのカチャカチャという音が、神様の力を呼び寄せるといふことらしくて。あの、鳴らしかたにも、なかなかコツが必要でして……」

※ おはやがデタラメに語っているところに

……

巴屋主人 (部屋の外から)

「あの……お話し中、恐縮でございます。この家の主人でござい

ざいます。目通りをお許しただけですしょうか」

善八 「おや、だれかと思ったらこの家のご主人。どうぞ、なかに入っておくんなはれ」

巴屋主人 「それでは失礼をいたします」

SE フスマを開けて入ってくる

巴屋主人 「失礼をいたします。私はこの旅籠、巴屋の主人をしております。彦三郎と申します。このたびはご鼻肩を頂き、有り難う存じます」

善八 「礼を言うのはわしのほうや。さすがは東海道、三島でいちばんの旅籠。肴も御飯も一流。さきほど使わせていただいたお湯も結構なもんでした」

巴屋主人 「鴻池さまにお褒めをいただき、有り難い限りです。ところで……お部屋を訪ねたのは、お願ひ事があってのことでございます。じつは。……大きな声では申し上げることが出来ないのですが……昨日、この宿に備中のお侍様三名がお泊まりになりました。」

とところが、お休みの間に、お侍様の巾着がなくなるという事件がおきました。巾着の中には金子七十五両。それに、幕府におさめる公式の書き付けが入っていたということです。お侍様は、宿の者が関係したに違いないと仰いまして。明日までに解決をしなければ、表沙汰にし、役人の取り調べをもつてコトを明らかにすると仰っているのです」

善八 「そら、えらいこっちゃ」

巴屋主人 「いまは下の部屋で、私の俵がなんとかおさめていますが、それも時間の問題。巾着が出ないことには、大変なことにな

つてしまいます」

善八

「役人の取り調べが入っては、金だけでは済まない損害や」

巴屋主人

「その通りでございます。そこで、お願いでございます。ここにいらっしやいます、おはや様、ゴンタ様は江戸でも評判の占いの先生と伺いました。なんとか、そのお力で、巾着の行方を占ってはいただけませんか！ なにとぞ、お願いでございます！」

善八

「うむ。困ったときはお互い様やなあ。先生、ひとつお願いできませんか？」

おはや

出来るわけないでしょ!!……と私は心の中で叫びました。けど、けど、ここでもシリアスな雰囲気呑まれてしまった私。ゴンタをヒザに乗せると、なるべく涼しい顔で、

「わかりました。」

しかし、旅先での占いとなると、色々な準備が必要です。

まず、部屋で占いをするのは、私と、このゴンタだけ。

夜通しかかると思いますが……中は決して覗かないでください。

さい。

それから……ちょっと準備をしてほしいモノがあります。

まず、丈夫な草鞋を一足……いや、替えもいるので二足。

おむすびを十コほど。具はおかとか、鮭がいいです。あ

と……お金を一分か二分……お願いできますでしょうか。

あ、そうだ。ここは二階ですよ。

それじゃあ、縄ばしごもお願いいたします」

巴屋主人

「わかりました。すぐに用意をさせますが、なかなか大変なお道具があるものなのでね」

おはや

「ええ……まあ……色々な秘術がございまして」

巴屋主人

「くれぐれも、よろしくお願い申し上げます」

○シーン4

半刻後（一時間後）

前と同じく「巴屋」の二階座敷

夜中

SE 犬の遠吠え（時間経過の意）

おはや

「（ゴンタに）」

さあ、ゴンタ、ばれないうち、一緒にばっくれるよ」

SE ニヤー……（わかったよ）

おはや

「えーっと。草鞋に脚絆きんぱん。おむすびも持って。

まあソロバンは置いていってもいいかあ。

さ、ゴンタもこっちにおいで」

SE ニヤー（何らかの意思表示）

おはや

「そっちは廊下。わたしたちは窓から逃げるんだから。

はやくこっちに。ゴンタ」

SE ニヤー（何らかの意思表示）

おはや

「ん？ 廊下が気になるのかい？」

SE ゴトツ（廊下から音）

おはや

「（警戒し）だれ？ 廊下に誰かいるね!」

おみつ

「（廊下から・田舎訛り）申し訳ねえっす。

わたしは、この家の奉公人で、みつと申します。

先生様に申し上げてえことがあって、まいりやした」

おはや

「（キャラを変えて、重々しく）」

占いの最中は、誰も訪ねてきてはいかんと、主人に伝えて

おいたのだが、そなたは、それを聴いてはおらぬかな」

おみつ

「はい。主人から聞いてはおりましたが、どうしても先生様にお話ししなくてはならないことがあって、まいりやした」

おはや

「うーむ……」

いま取り込み中なので、明日というわけにはまいりませんか」

おみつ

「それが、どうしても今夜でなくては。話というのは、備中のお侍様のお金のことです」

じつは（声をひそめ）……私がおの中着の行方をしっておみやす……」

おはや

「巾着の行方を……（素に戻って）……ま、まじ!?
いま開けますので、どうぞ、どうぞ中に」

SE フスマを開ける

おみつ

「占いの最中に、お邪魔をいたしやす」

おはや

「いえ、それで、おの中着の行方というのは？」

おみつ

「へえ。いまからお話しすることは、どうぞここだけの話にしてくださいませ。お願いいたしやす（涙声）」

おはや

「わかりました。小さな声で話しましょう」

おみつ

「じつは……お侍様の中着を盗ったのは、このわたくしでございます。決して悪気があって、やったことではございません……。（わーっと泣く）」

おはや

「大丈夫、大丈夫だから。続けて」

おみつ

「じつは、田舎に残してきた父さまが、去年の秋から患いまして、横になったきりでござえやす。お医者様のお見立てでは、人參（※高麗人參）という有り難い薬を飲んで、あったけえところ療治をすれば、だんだんと良くなるだろうと仰

います。

けれども、そんな高い薬を買うようなお金は、うちにはありません。この家の番頭さんに給金の前借りを願げえしやしたが、バカを言うなど、すげなく断られました。

そんなときにお泊まりになったのが備中のお侍様。大事そうに抱えた巾着の中には、お金もあるんじゃないかとほんの出来心で……（泣く）」

「わかりました。それで、巾着はどこに？」

おはや

「中を見たら思ってた以上の大金で。わたしはそれを見たら、自分のしたことが怖くなりやして。紐をきつく縛って、この家の庭にありやす大神宮様のお社（やしろ）の床下に隠したのでござえやす」

おはや

「なるほど」

おみつ

「……みなが寝ているうちに、巾着を戻そうかとも考えました。けれども、そう思った矢先にお泊まりになったが先生様なんでも、江戸で名高い、占いで何でもお見通しになる先生だと聞いておりやす。

それでは、隠し事をして、すぐに現れると思って、自分から出てまいった次第です。

おはや

「……やっぱり、わたしのことが占いにでていましたか？」

おみつ

「え？（慌てて）うむ。出てます、出ています。おみつという名前までは出ていませんが、この家の奉公人で年若い娘と出ております……」

おはや

「神様へ許してくだんせえ（泣く）」

の、大神宮様のお社の床下ね。わかった。あとは私が丸く収めるから、あなたは部屋に帰ってこのまま休んで」

おみつ 「本当でござえやすか！」

わたしはお縄にならねえですみますか」

おはや 「心配は無用です。」

さ、人目につかないように早く……」

SE 大風の音（時間経過の意）

（一時間ほどのち）

巴屋主人 「先生。占いが出たというのは本当でございますか」

おはや 「本当です。いまから神聖なお告げをお伝えいたします。

心してお聴き下さい」

巴屋主人 「お願いいたします」

おはや 「今回の中着の一件は、物盗りではありません。この家でお祀りをしている、大神宮様が、人間たちにあることを伝えようと、起こされたことです。」

この家の庭には、大神宮様のお社がございますか？」

「はい。井戸の隣に、ふるくからのお社がございます」

「ここ一年。お手入れやお供え物は？」

「あ……あの、ここ一年ほどは色々雑事が続き、あまり掃除も行き届かず……。そういえば、お供え物や御神酒をあげるのも、ごくたまに、という感じで……」

「それです。家をお守りする神様に対してあまりの扱いです。」

大神宮様は、このことについて、ことのほかお怒りです。

このことをご主人様はじめ、店の皆々に伝えるため、巾着をお隠しになったのです」

巴屋主人 「なんと……私どもはどうしたら……」

おはや 「これからは、お社の掃除、修繕を欠かさず行うこと。お供え物や御神酒は毎日あげてください。それだけではありません。大神宮様は、徳を積むべしと仰っています」

「はい。なにかの施しをいたしましょうか」

巴屋主人 「この家には、十七、八歳になる田舎訛りの、女の奉公人がいるはずですよ。占いによりますと、その子の田舎のお父上が、病で苦しんでいるとのこと。この家のお金を使い、お父上の療治をするように……とのお告げが出ています」

おはや 「それはきっと、おみつという奉公人のことでしょう。はい、承知いたしました」

「それから。店の番頭が、あまり簡のよくない言動をして

いるようです。これからは心を入れ替えるよう、ご主人様からきつく言い渡してください」

おはや 「はい。必ず」

「最後に。巾着は手つかずのまま、お社の床下にしまってあるとお告げです。役人などは呼ばず、このまま、ご主人様がうまくおさめてください」

「はあ！ おありがとうございます！」

（店の者に）おい、明かりを持って。大神宮様をお調べする。いますぐ行くから。なに……あった。巾着があったか！ よし、それからお掃除、お供え物。はやく！ わしがする！

いま行く。先生、御礼はのちほど。有り難うございます」

おはや 「ふーっ。なんとかなった〜」

ころがるように庭へ降りていった主人を見送り、そのまま

ヘナヘナと体中の力が抜けていったそのときでありました。

SE 神々しい音……

おはや

「こんどはなに〜？（泣）」

部屋の床の間になにやら光る物体が出現したのです。

それは、錦絵などでみる、神様仏様のような姿をしています。

大神宮様

「そこの娘よく聞け。

我はこの家*に祀られる、大神宮の神体なり。

そなたの行いは、往々にして、苦しませ、出たとこまかせ、運まかせ……とは申せども。

弱き者を救う心根は潔白。また、猫を可愛がる優しき性分あり。また、近年、ないがしろにされていた、この大神宮を引き合*いに出し、社の手入れ、修繕、また供え物の件、よくこの家*の者に申し伝えた。礼を申す」

おはや

「（あっけにとられ）……は、はあ……っ……」

大神宮様

「その徳により、特別に、通力のある護符（ごふう・お札）をそなたに与えん。この護符の威徳により、鴻池の娘の病は全快するであろう。はや大坂へ、急ぎ候へ」

おはや

「（わからぬままに）は、ははあ〜」

……みなさん、付いてきますか？

そーゆーわけでありまして、私の口から出任せ、運まかせの「占い」が、本物の大神宮様までお招きをってしまったのであります。

大坂へと足をはやめた私、善八さん、それにゴンタ。

鴻池様にお屋敷につきまして、この護符をかざしますと、

箱入り娘

お嬢様の病気はけろっと全快。

「わたし、鰻重が食べたい！」

なんて。若いコは胃が丈夫。

……瓢箪から駒と申しますか、嘘から出た誠といいますが、私の機転の良さ！ といいますか。すべてが丸くおさまったわけでございます。

まあ、こういうホントの話は、これまでしたこと無いのですが、今日は青山二丁目劇場のために、特別に、すべて真実をおはなしました。

ウラはひとつもございません。ウラの無いはなし。ウラないはなし……これが本当の「占いはなし」の一席でございますました！

SE ゴンタ「ニヤ〜」（長く・可愛く）

おわり

「御神酒徳利 苦しまぎれの猫占い」創作ノート

落語を含めた「ひとり語り」の形式をもつ話芸は、そこで発語されるすべての言葉が、語り手を消^{ツブシ}失^{シテ}点^トとする遠近法の構図の中に位置づけられる。

ある一点——語り手のポジション——によって収斂される言葉、それはナレーション（地の語り）であったり、劇中の「会話」であったり、ときには聴衆への直接的問いかけであったりするが、そうした、さまざまな言葉を、緊張感をもった空間に構成し、総体として明瞭なイメージを立ち上げること。これがすなわちひとり語りの「藝」である。

なにも落語だけの話ではなく、たとえば稲川淳二の怪談や、伊集院光がラジオ番組で聴かせるトークも同じ構造のなかにある。

この「ひとり語り」の形式においては、語り手のポジションが聴衆に可視化されている。可視化されていないことには、語り手が作中世界をフレイミングしていくことが出来ない。彼はつねに作中世界よりも上位に位置し、すべてを見通す存在である。ここでは「地の語り」と「台詞」はつねに同一の階層にあり——というよりも、本質的に「台詞」は「地の語り」に包括されているので——相互の「乗り降り」は自由である。

同じことを別の角度から言えば、「ひとり語り」の藝における人称はつねに語り手のみ帰属して、作中人物の視点による「一人称の語り」は成り立たないということになる。

一人称で書かれた小説における人称は、作者ではなく、作中人物に帰属する。たとえば、村上春樹の小説における「ぼく」は、作者のことを

指すのではなく、作中の語り手である「ワタナベノボル」を指す。小説のストーリーは作者（たとえば村上春樹）が進めているにもかかわらず、読者は作中人物（たとえばワタナベノボル）が出来事を描写し、回想し、はなしを進めているという「約束事」に従って、それを読む。

「ひとり語り」の話芸における語りは、これとはさかさまで、作中の語りはすべて語り手と不可分の関係にある。「鯨澤」の語り手である三遊亭圓生が地の部分で「私も身延山へ行ったことがあります」と語り出せば、それは作中人物の誰かでは無く、「圓生」その人の発言になる。登場人物のひとり、たとえば旅人が地の語り（＝内心の声として）において「私も身延山へ」と語り出すことは無い。それが語りの階層を混乱させる行為だからである。これが「ひとり語り」の話芸と、演者が特定のキャラクターを演じる「ひとり芝居」との違いである。作中人物の台詞は、動かない語り手から放射状に引かれた線上に位置する。聴衆は語られる言葉との距離を近づけたり遠ざけたりする語り手の「手綱さばき」をこそ、見物しているといってもいいだろう。

なぜこのようなことを長々と記すかと言えば、落語のような話芸をラジオドラマに再構成するにあたり、もっとも重要なファクターが、語り手の位置をどこに設定するかという問題にほかならないからである。近代劇のバリエーションであるラジオドラマは、「落語家」のようにすべてを見通し、かつその存在を可視化させる「語り手」の存在を普通は設定しない。したがって、放送劇の作者は、そのドラマが「どこから語られているのか」をそのつど設定する必要がある。

落語の『御神酒徳利』は、〈めでたい噺〉の代表作といつてよく、祝言の落語はほかにも「かつぎや」、「御慶」、「黄金の大黒」などいくつもあがるが、本作はストーリーがしっかりしているので、ほかの作よりも

（立派）な斬という印象を与える。昭和四十八年、ときの皇后の古希記念の催しとして三遊亭圓生が宮中に招かれ、御前で口演をしたのがこの『御神酒徳利』であった。圓生は考慮のすえ、面白く、おめでたく、下品なところがないという理由（当然、廓斬というわけにはいかない）でこの斬を選んだと語っている。落語において、ストーリーがしっかりしている斬は、「人情斬」か「講談などから輸入された斬」であることが多い。本作の成立について確たる資料は無いが、鴻池をはじめとして旅籠、宿屋などに固有名が当てられているので（滑稽斬では固有名は多くの場合、省かれる）、実説の体裁をとった逸話がまずあり、それが落語に仕立てられたものかと私は想像する。

さて、落語の『御神酒徳利』の主人公は江戸・馬喰町の旅籠の通い番頭、つまり男性であるが、今回、私はラジオドラマ化にさいしてこれを女中に変更した。これが原作との最も大きな相違である。（落語には旅籠に出入りする八百屋を主人公とする型もあるが、これも男性）。

なぜこのような改訂をほどこしたのか。

先に記したように、落語は原則として作品を超越する存在である落語家の語りによって進行する。つまり三人称として主人公の番頭と彼の周囲の騒ぎを語っていく。ラジオドラマで同様のストーリーを語っていく場合、超越的存在としてのナレーターを置くか、あるいは登場人物の一人称を設定して語りを進行していく方法が考えられる。今回、私は後者の方法を選択し、さらにそれを「女性の一人称」に設定した。

以下は実作者としての実感になるが、ドラマの作中世界は、一人称の性差によって大きく左右される。それは現実世界において、男性／女性をとりまく社会文脈が大きく違うことの反映であろう。

具体的にいえば、女性の一人称はモノローグにおいて外部（自分の外

の事象、風景、制度）との距離感をハッキリ語るのに適している。男性が、男性であることと社会的であることを当然のように包括するのたいていして、女性はおそらく、「私」と外部との疎外感を敏感に察知し、それをつねに意識化する。ラジオドラマにおいては、外部に発語される「台詞」と内的な「モノローグ」に落差が生じ、それが強いコントラストになる。ことに、内省的な語りが意味を持つドラマにおいて、女性の一人称はその効果をあげる。

『御神酒徳利』の主人公に内省的な要素はとくに無いが、私は主人公を外部に対して批評的な目を持つ人物に設定したいと考えた。実体が空洞でしかない——それはシンボルとしての御神酒徳利に通じる——「占い」に右往左往する人々を、その当事者でありながら傍観し、クールに相対化すること。そのため主人公を創造すること。それが、私が本作の主人公を男性から女性に改訂し、かつ一人称視点を採用した理由である。

女中という、旅籠主人や番頭と違って、奉公人でありながら「制度外」の視座を持つ主人公の語りによって、アクチュアルな「笑い」を出現させることに、ある程度は成功したのではないだろうか。（執筆のあとに気がついたが、私の好きな筒井康隆『家族八景』ほかの「七瀬シリーズ」が、中産階級の家庭に奉公する女中の視点から、さまざまな家族を突き放して描写するという、同様の構図を採用している）。

また、落語では発端の「狩豆屋」の御神酒徳利詮議がまずあり、そのあとに旅先での事件（落語では通常、神奈川宿。本作では旅の雰囲気を出す意図から三島宿に変更）がある。つまり時間軸に沿った順序で出来事が語られる。

本作ではそれを入れ替え、主人公が三島宿に入るくだりを先に置き、

回想場面として御神酒徳利詮議のくだりを挿入した。ここで、狩豆屋の主人には声優を立てず、「おはや」のひとり語りで処理したが、いわばミソである。劇中劇ならぬ、「ドラマ内落語」という趣向である。「ひとり語り」の方法を持ち込むことによって、このドラマのルーツである落語の雰囲気を出すことを意図した。

また、落語では宿場の一件から、主人公が大坂に入り、鴻池家に神体が出現するという運びになるが、本作ではそれを圧縮し、三島の宿屋に神体が現れるという構成に改訂した。これは舞台を移さず、一場においてドラマの密度を高めるという作意である。つまり、本作においては、舞台は三島の宿場から動かない（事実上のドラマが終わった後に、一声だけ鴻池の令嬢の台詞が入る）。

主人公が自分が水瓶に沈めた徳利を失念するというくだりは原作通りなのだが、脚色にあたって改訂すべきかどうか迷った。短時間の忘却に不自然さが残るからである。ここに何らかの「自然な展開」を持ち込むことも考えたが、この単純さがいかにも落語らしく、捨てきれない思いもあり、今回はそのままとした。（先に記した、主人公を八百屋とする型では、主人公が、意地悪な女中へのいたざら乃至は意趣返しとして徳利を水瓶に沈める。そこには合理性があるのだが、いま現在の私は一人称ドラマの設定として、発端の一件は無作為であったほうが良いと考えるので、この型は採用していない）。

主人公の占いを「猫占い」としたのは今回の創作で、ラジオドラマらしい音の効果が生じると、主人公が猫に語りかけることによって変則的な「会話」が成立するという意味がある。また、漱石の『猫』に顕著なように、猫という動物は、周囲のあらゆる出来事を相対化する謎めいた魅力がある。その効果。さらに言えば、猫を出すことで、ドラマにあ

たたかみが出たと思う。猫の名前は、私がむかし飼っていた猫のものである。

ラジオドラマ「牡丹燈籠 真夜中のヒロイン」

(登場人物)

- ・お露 (幽霊・トモコの姿を借りる) (18歳)
- ・タカシ (高校生・映画研究会) (18歳)
- ・トモコ (高校生) (18歳) ※お露と二役
- ・コウスケ (高校生・オタク) (17歳)
- ・およね (幽霊・お露の乳母) (35歳)
- ・飯島 (高校近くの喫茶店主) (40歳)

○シーン1 冥土のお屋敷

SE 優雅な音楽……。

SE 階段をあがってくる音……。

およね

「お嬢さま〜! お露さま〜!

いったい、何時までお休みをされているのですか?

今日はことのほか、きれいなお月様が出ていますよ。

旦那様も奥様も、こんな日にはお月見をしようってお待ち

かねです」

SE ドアをノック

およね

「お露さま、開けさせてもらいますよ」

SE ドアノブの音(ガチャ、ガチャ)

およね

「あれ! またドアに何か仕掛けをしたんですか?

そういうことをすると、奥様に叱られますよ。いいですか、

無理にでも開けますよ。まったくもう。子供じゃないんだから。聴いてるんですか?

(少し不安になり) お嬢様? お露さま!?

SE このセリフに船の汽笛かぶる

○シーン2 冥土の船着き場(三途の川)

お露

「(汽笛の中で) ちょっとまって〜。乗ります、乗ります!」

SE 汽笛の音

お露

「ふ〜っ。間に合ったあ。お小遣いをためてやっとならぬか!」

盆臨時便のプラチナチケット。無駄にするものか!

およね、ゴメンね。ちょっとだけ留守にするから、今回だけ見逃して。ど〜しても、この夏にあっちに行っておきたい

んだ。お土産たくさん買って帰るから。ね」

「(置き手紙を読んでいる)

およね

私にはどうしてもこの夏にどうしてもあっちを訪ねてお

きたいのです。必ず無事に帰りますから、どうぞ心配をしないで

てください。私も十八になります。もう子供じゃありません。

それでは。露。

……お嬢さま!……」

SE 船の汽笛……

○シーン3 この世。都内の墓地。

映画研究会の「牡丹燈籠」撮影中。

SE ロマンチックな音楽……。

トモコ(お露役) 「新三郎さま。あなたは不実なおかたです。私の心の

内を知りながら、どうして知らぬそぶりをされるのですか。
向島のお屋敷であなたを見初めてからというもの、考えるのは新三郎さまのことばかり……」

タカシ(新三郎役) 「お露さん、それは思い違いです。

私の心もあなたと一緒に。しかし、いまの私は本家を離れ、ひとり蟄居をしている身の上。いずれはあなたと一緒にになりたいと考えています」

トモコ 「ああ、新三郎さま。どうしてあなたは新三郎なの」

タカシ 「お露さん……」

トモコ 「新三郎さま！」

SE 盛り上がったところで携帯の着信。

トモコ 「……あ、ゴメン、携帯切ってなかった。ちょっとだけまって」

コウスケ 「いったんカメラ止めま〜す」

トモコ 「(携帯出て) あ、もしもし、うん、大丈夫だよ。なに？……」

タカシ わが、坂の上高校 映画研究会の自主制作活動も、いよいよクライマックスを迎えている。今年の作品は、落語の怪談

噺をモチーフにした「牡丹燈籠」。

新三郎という若者に恋をしたお露さんというお嬢様が、恋わずらいでついには命を落としてしまう。しかし、お露と、

彼女の乳母、およねはあの世の人となってからも、毎夜毎夜、牡丹の形をした燈籠を手にして、カラーン、コローンと下駄

の音をさせながら、新三郎のもとへ通ってくる。

……という、よく知られたストーリーだ」

トモコ 「(電話の会話) えーっ？ いまから？ だけども学校のクラブ活動で……」

タカシ ヒロインである「お露」を演じるのが、同級生のトモコ。

部員が少ないわがサークルでは、彼女が毎回、ヒロインを演じている。

コウスケ 「監督、いまのうちにデータをパソコンに移しちゃいますね」

タカシ 彼は映画研究会の撮影・音響・照明のすべてを担当するコウスケ。いわゆる映画オタクで、ときには出演もする。

で、ぼくは一応、研究会の会長で監督。今回は、哀れにも死者に魅入られた新三郎を演じています。

トモコ 「タカシ、いま考え事中？」

タカシ 「……いや、なにか？」

トモコ 「……あのー……ホントーっにゴメン!!」

○シーン4 喫茶店 イイジマ

それらしきBGM

タカシ 「外国にいるお姉ちゃんが赤ん坊を産んだから、家族みんなで会いに行くことになった。場所はレイキャビク。レイキャビクってどこだよ！」

コウスケ 「検索をしてみますと、レイキャビクはアイスランドの首都。

人口はおよそ12万人」

タカシ 「……んなことあ訊いてない！」

赤ん坊に会いに行くから、続きの撮影は日本に帰ってきてから。帰ってくるのは8月末って、それじゃあ文化祭に間に

合わないんだよ」

イイジマ 「なんか大変そうだね〜?」

タカシ 「あ、ついアツくなっちゃって……すいません」

イイジマ 「いいっていいって。この時間帯は、君たちの貸し切りみた

いなもんだから。今日は何にする?」

タカシ 「ホットコーヒーを」

コウスケ 「えーっと、ぼくはお汁粉を」

タカシ 「(呆れて) この暑いのにお汁粉ねえ。……おまえの言動に

は危機感というものがまったく見られない」

イイジマ 「いやー、夏のお汁粉もなかなかオツなもんだよ。

(以下、仕事をしながらという感じで)

……で、映画研究会 本年の大作、牡丹燈籠の撮影はどの

くらいまで終わってるんだっけ?」

タカシ 「きょう、お露と新三郎が親しくなるところまでは撮影完了。

このあとがいよいよ眼目の展開。

死者に魅入られた新三郎は、日に日にやせ細っていく。

真相を知ったお寺の和尚様が、家の扉という扉、隙間とい

う隙間にお札を貼って新三郎のことを守ろうとするんだけど

……」

イイジマ 「あく。そのあとはおれも知ってるよ。お露とおよねは、新

三郎の隣に住む男に金を渡し、お札をはがしてしまふ。そし

て、ついには新三郎のことを、あの世への道連れにしてしま

う……。いわゆる「お札はがし」ってやつだな。せつないは

なしだ」

タカシ 「けれども、お露役のトモコがないんじゃないじゃ、撮影がすす

られない。それでアタマを抱えてるってわけ」

コウスケ 「小道具の牡丹燈籠も、はりきって、もう作っただけすけ

ね」

イイジマ 「コウスケは手先が器用だからなあ。あとで見せてもらうよ。

はい、おまち」

SE 下駄の音

およね 「(運んできて) お待たせいたしました。こちらがホットコ

ーヒー、こちらがお汁粉でございます」(幽霊ふう)

コウスケ 「来た来た。いただきまーす!」

タカシ 「いいよなあ、お汁粉に集中できる、その精神性」

およね 「まあ、本当に良くできていますね、この牡丹燈籠……」

コウスケ 「あ、もしよかったら灯りも付けてみてください。LED電

球が中に入っていますから」

およね 「LED……ですか? あ、ほんとだ、灯りが付きました。

なんだかとても懐かしい」

タカシ 「懐かしい……んですか?」

およね 「……ええ、その昔、いや、その……子供の頃にこんな燈籠

が家にありました」

イイジマ 「紹介するよ。夏の間、この店で働いてくれていることにな

ったウエイトレスのヨネクラさん。こちらはタカシ君にコウ

スケ君」

およね 「どうぞお見知りおきくださいませ」(古風に)

タカシ 「こ、こちらこそ。ヨネクラさんはずいぶん丁寧な話し方を

されるんですね」

コウスケ 「ヨネクラさんって、牡丹燈籠のおよねにイメージが似てい

るかも。ヨネクラ、およね、名前も似ているし。もし時間があつたらぼくたちの作品に出て貰ったら……」

およね 「まあ、ありがとうございます。しかし、あまり時間がないのです」

コウスケ 「そうなんだ……」

およね 「ちょっとした用があり、「こちら」に来ているのですが、用が済んだら西に帰らなくてはならないので」

タカシ 「西……大阪とか？九州とか？」

およね 「いやもっともつと西……西国浄土という……いや、あのとにかくずーっと西のほうです」

コウスケ 「へー……で、どうして飯島さんの店で働いてるんですか？」

およね 「ウエイトレスは前にも経験がありました。冥土の一丁目、六道の辻にある「冥土カフェ」で一年ほど……」

二人 「め……メイドカフェ……!？」

およね 「お帰りなさいませ、ご主人様！
コーヒーがよろしいでしょうか。それとも紅茶にいたしま

しょうか？今日は葬式饅頭もご用意できます。うふふふふ」(店員のセリフで)

○シーン5 映画研究会 部室 夜

SE 不穏な風が立ち コウモリが飛ぶ音

SE 下駄の音……(エコー)

タカシ ぼくは、からんころんと響く下駄の音で目を覚ました。

そうだ。夕方、コウスケと別れた後、シナリオを書き直す

ために部室に戻って、いつのまにかイスで寝入ってしまったのだ。外はもう暗い。いまは何時になるのだろう。

SE 下駄の音……

「(ごく薄く) 新三郎さま……新三郎さま……」

下駄の音はだんだんと、部室のドアに近付いてくる。いったい、こんな夜更けにだれだ。こう見えても……おれは怖がりなんだ!!

「(やや大きく) 新三郎さまはこの部屋の中ですわ……」

誰かの悪ふざけだろうか。下駄の音と、女の人の声はドアのすぐ向こうから聞こえてくる。ぼくはドアに近づくと、覗き穴から、そっと廊下を伺った。

「おかしいな。誰もいない……」

声はすれども姿は見えぬ。ぼくはレンズを通して、必死に右を見たり、左を見たりした。

(がらつと変わって)

「あのさー……。よっぽど穴を覗くのが好きみたいだね。この新三郎さんは」

「うわあ!」

声をする方をむくと、お露……いや、浴衣を着て下駄をはいたトモコがそこに立っていた。

「トモコ? だよな。脅かすなよ! いったいいつの間に部

室に入ったんだよ!？」

「あっ。いけね。ついうっかりすーっと。……いや、タカシ

が寝ている間に、じつは部屋に入ってた」

「ホントかよ? 全然気がつかなかったなあ……。第一、お

まえ、レイキャビクにいったんじゃないのかよ」

お露 「えーっとね……(考えて)……なんか、お盆で人数分のエアチケットがとれなかったみたいで……で、わたしはこっちで留守番」

タカシ 「そうなんだ。それで、なんで撮影もないのに着物を？」

お露 「それは……役作り。役作りというか、私の場合は地のままでも行けるんだけど……いやなんでもない。演技論の本に、役は形から入れて書いてあったんで」

タカシ 「熱心だな。でも、今日はもう帰ろうかと思ってただけど」

お露 「(色っぽく) ねえ、タカシ。わたしたち、役の上ではあるけど、お露と新三郎、恋人同士の設定だよ」

タカシ 「たしかに」

お露 「だったら、もっと役作りに励んだほうがいいと思うんだよね」

タカシ 「じゃあ、台本の読み合わせをもっと……」

お露 「(かぶせて) そういうんじゃないかって。もっと、イロイロな経験をしたほうがいいんじゃないかって。そういう意味。ねえ、このあとは何もないんでしょ？」

タカシ 「うん、まあ」

お露 「じゃ、服脱いで」

タカシ 「服を？ 脱ぐ!?」

お露 「その学生服を脱いで、タカシもこの着物に着替えて。その間は廊下に出てるから！ それから、これも」

タカシ トモコはそう言うのと、ぼくに紺の着物と、木の良い香りの

する下駄をさしだした。

○シーン6 東京スカイツリー展望台

明るいBGM(デート中)

お露 「わあ、いい眺め。一度のぼって見たかったんだ、東京スカイツリーの展望台」

タカシ 「夜でもけっこう人が出てるなあ」

お露 「あっちが浅草で、これが隅田川……ということは「向島」はこのへん？」

タカシ 「向島は、スカイツリーのほとんど足元……あのへんかな」

お露 「ふーん。あのあたりか……(眺めている)」

タカシ 「向島になにか見えるの？」

お露 「にぶいなあ。牡丹燈籠のなかで、お露と新三郎は向島のお屋敷でお互いに一目惚れをした。いってみれば、運命的な場所だよ。そこを確認してるわけ」

タカシ 「そういえば、そうだな」

お露 トモコは真剣な顔つきで地上を見下ろしていた。それは、見慣れた同級生の、はじめてみる「顔」だった。ぼくはトモコが自分より何歳も年上であるかのような錯覚をおこしそうになった。

お露 「タカシ、一周したら下でプリクラ撮るよ」

タカシ 「プリクラ？ おれ、ああいうのはあんまり……」

お露 「いいから、いいから。はい、せーの！」

SE パシャッ！(撮影)

タカシ トモコは強引にぼくの手を取ると、プリクラの撮影をした。

お露 「ほら、お露と新三郎。私一枚。タカシ一枚。この夏の記念に」

タカシ シールになった写真の中には、ほくたち2人が……いや、

たしかに牡丹燈籠の「お露と新三郎」が並んでいた。

お露 「隅田川にいつてみよっか。えーっとかっこかな」

SE 下駄の軽やかな音

タカシ 「ちょっと待ってよ」

お露 「ほら、こっちこっち」

タカシ それからあとのことは、よく覚えていない。トモコに手を

引かれて隅田川の川べりを散歩したと思うのだが、そこから

先の記憶がぼんやりとしている。

……あれは夢かうつつか。甘い香りのする牡丹の花びらに

つつまれて、一夜を過ごしたような気もするのだけど……。

SE 下駄の音（2人が歩いている）

○シーン7 数日後 昼間 映画撮影

コウスケ 「シーン12、テイク1。よいい、スタート！」

新三郎 「話というのはほかでもありません。私のことを気に掛けて

くださる良和尚が言うには……私とお露さんが一緒にいて

はならないと」

お露 「和尚様は、どうしてそのようなことを」

新三郎 「お露さん、怒らないで聞いて下さい。和尚様は、あなたと

およねさんはこの世の者ではないというのです。それだけで

なく、逢うことをやめなければ、私の寿命は近いうちに尽き

ることになると」

お露 「それは世迷いごとです。きっと、私と新三郎さまの仲を引

き裂こうとする男達がそのようなことを言いふらしているの

です。さあ、新三郎さま、もっとこちらにおいでください」

新三郎 「お露さん……」

お露 「人目にふれぬよう。この燈籠は……ふーっ（息で消す）

……

ほら、これで真の闇になりました。……新三郎さま!!」

コウスケ 「カットー! いやいいっすね! 追真の演技!」

飯島 「なかなか本格的にやってるなあ。いつものあのコンビとは

思えないね」

コウスケ 「飯島さんもそう思います? なんか三日前くらいから、急

に演技のクオリティがあがったんすよね。とくに、会長がぐ

っと大人っぽくなったっていうか」

飯島 「タカシはダイエットでもしてるのか? こないだ店に来た

ときよりも随分やせてないか? まあ、映画の設定にはびっ

たりだけど」

コウスケ 「それはおれも思ってるっす。それに目の下にちょっとクマ

が出来て、なんか足元もフラフラして……。会長、大丈夫で

すか?」

タカシ 「ああ、ちょっと休憩するよ。ここんとこ、何だか疲れが抜

けなくって」

飯島 「差し入れにジュース持ってきたら。その袋の中」

タカシ 「ありがとうございます。……それにしてもトモコは元気だ

なあ。ほとんど休憩もしないし。疲れないのかな」

SE 携帯の着信音

コウスケ 「会長、携帯なってます」

タカシ 「おう、ありがとう。(着信見て) トモコ? なんだこりゃ」

SE 携帯の着信音が出る

タカシ 「……は、はい。どちらさま、ですか?」

トモコ 「(電話) 誰ですか? ってずいぶんご挨拶だね。着信に出てるでしょ? もう私のことわすれちゃった?」

「トモコ?」

タカシ 「トモコ?」

トモコ 「私じゃなかったら誰なの!? あのさあ、日本に予定より早く帰れそうなんだ。そしたら撮影合流するから」

「だけど……トモコはここに……」

タカシ 「(セリフの練習) 新三郎さま。私のことはゆめゆめ邪険に

お露 しないてくださいませ。お露とあなたは、結ばれる運命にあるのです。……」

「目前にいるのはトモコ。電話の向こうにいるのもトモコ。いったいこれはどうしたわけなんだ!」

タカシ 「早ければ、今夜の便で。ねえ、聞いてるの? 返事ぐらい

トモコ しなさいよ。ねえ! ねえったら!」

「BGM 謎めいた感じ」

タカシ 「……というわけ。驚かせちゃったかな。黙っててゴメン」

「じゃ、君は本当に幽霊……本物のお露さん?」

お露 「怪談嘶に出てくるお露さんは、あれは私のママ。私はお露と新三郎の娘で、ま、二代目お露といえはいいのかな」

タカシ 「……は、はい。どちらさま、ですか?」

トモコ 「(電話) 誰ですか? ってずいぶんご挨拶だね。着信に出てるでしょ? もう私のことわすれちゃった?」

「トモコ?」

タカシ 「私じゃなかったら誰なの!? あのさあ、日本に予定より早く帰れそうなんだ。そしたら撮影合流するから」

「だけど……トモコはここに……」

タカシ 「(セリフの練習) 新三郎さま。私のことはゆめゆめ邪険に

お露 しないてくださいませ。お露とあなたは、結ばれる運命にあるのです。……」

トモコ 「早ければ、今夜の便で。ねえ、聞いてるの? 返事ぐらい

「BGM 謎めいた感じ」

タカシ 「……というわけ。驚かせちゃったかな。黙っててゴメン」

「じゃ、君は本当に幽霊……本物のお露さん?」

お露 「怪談嘶に出てくるお露さんは、あれは私のママ。私はお露と新三郎の娘で、ま、二代目お露といえはいいのかな」

タカシ 「だけど、牡丹燈籠ってずいぶん昔の嘶だよ。お露さんは十八歳だって」

お露 「あーあのね。この世とあの世では時間の流れかたが違うんだよね。だから、あの世タイムでは、私はまだ十八歳で、ママはまだ三十九歳なの。相対性理論ってやつ。わかるよね」

タカシ 「わかったような、わからないような」

お露 「まあ、あの世は平和なんだけど、刺激もなくてさあ。おまけに私、冥土女子学園っていうお嬢様学校に入っちゃったもんだから。まあ自分で言うのもなんだけど、箱入りなんだよね。うちの学校ってさー、最大のイベントが夏の盆踊りなんだよ。ひと夏の思い出が炭坑節……盆踊りは嫌いじゃないけどさあ」

タカシ 「それで、ぼくのところに来たのは」

お露 「あっちでママのこと色々調べてたわけ。そしたら、同じ年の高校生がママとパパの映画撮ってるって検索に引っかかって。それで興味を持って」

タカシ 「そんなことまでわかるの?」

お露 「文明はあっちのほうが進んでるから。だから、君が普段、部屋でしているあんなことやこんなことも、じつはじっくり見ました」

タカシ 「あんなことやこんなこと……」

お露 「ご先祖様が見ているぞ! って実はそういう意味なんだよ。勉強になった? 心配しなくても、明日には帰るから。その前にあと一時間だけ。ね、いいでしょ」

タカシ 「一時間だけ……ぼくは一体どうすれば……」

SE ドンドン！ (ドアを叩く音)

※ こちらはドアの外

トモコ 「タカシと私の偽者に告ぐ！ 部屋にいることはわかっている！ おとなしく出てきなさい！」

およね 「お嬢様、私と一緒にあの世に帰りましょう。この世のかたを巻き添えにはなりません」

トモコ 「出てこない場合は強行突破します！ ほれ！」

SE ドアを開けるような効果音。きしむ音。

トモコ 「なにこれ、ドアにテープが貼ってあって開かないじゃない」

およね 「それは、あの世で使われている強力な粘着テープです。

メイド・イン・冥土の、まあ、お札のようなものです」

トモコ 「ちくしょう。いったいどうしたら」

「さあ、このヘラを使ってはがしましょう」

トモコ 「このヘラもメイド・イン・冥土？」

およね 「いえ、コストコで買いました。ちょっとずつしか剝がれないのでたぶん一時間くらいかかるでしょう。さあ」

「なんか、じれったいなあ！ ちえ、やるか！」

トモコ

※ ドアの内では

お露 「あのお札は、すぐにははがれない。その間に……新三郎さま！ いや、タカシ……！」

「うわあー！」 (エコー)

タカシ

○シーン9 後日。エピソード。昼間。

タカシ トモコとおよねさんが部屋に飛び込むと、ぼくは床の上で

気を失っていたらしい。窓は開け放たれ、そこにお露さんの姿はもう無かったそうだ。そして、机の上には一通の置き手紙がおかれていた。

明るいBGM

「えいになにに。(読む)

タカシさま。このたびは私の勝手な振る舞いをどうぞお許しください。私の母、お露が父親である新三郎と結ばれたのは十八のときでした。だから、わたしも、十八歳のうちに、いちどは母と同じ体験をしておきたかったです。そう思っているときに、知ったのがあなたの存在です。私はトモコさんの姿を借りて、あなたの前に現れたのです。

あの夜、どんな体験をしたかは二人だけの秘密です。

私も心の奥にそっとしまっておきます。

タカシさんもそうしておいてください。

それではお元気で。

露

名前の下に牡丹のかわいいイラスト。

タカシくん？ なんだい、これは??」

「いや、あの……」

トモコ 「あの夜！ どんな体験をしたかお姉さんに正直に言ってごらん」

タカシ 「だから何も覚えてないんだって」

※ 2人言い合う「嘘付け」「本当だよ」「記憶に無いの！」等々。

※ 言い合っているところへ独白。

タカシ そういえば、あの夜に撮ったプリクラのシールは、撮影台

本のいちばんうしろのページにまだ貼ってある。もちろんトモコには内緒だ。

写真の中のお露と新三郎は、ぼくたちの作品が完成するよう、見守ってくれているに違いない。ぼくはそう思っている。

おわり

「牡丹燈籠 真夜中のヒロイン」創作ノート

『怪談牡丹燈籠』のパロディである。

原作は、明治時代前半に活躍し、近代落語の基礎を築いた三遊亭圓朝の傑作というだけでなく、落語というジャンルの長編怪談を代表する作品。

圓朝が『怪談牡丹燈籠』を創作したのは文久元年（1861年）とされる。その後、明治十七年（1884年）に日本初の速記本として刊行されると大当たり。圓朝の高座を知らない人々にも『怪談牡丹燈籠』の物語が知られることになり、以降、落語、講談の速記本が数多く出版されるきっかけともなった。当時、落語のレコード盤はまだ無く、つまり、圓朝の速記本は、大衆メディアによって複製された落語の第一号であったとも言える。

圓朝の原作は様々な先行作品を取り込んで構成されている。

直接的な原話に当たるのは中国・明時代の怪異譚を集めた小説集『剪燈新話』所収の『牡丹燈記』。

あらすじを簡単に記す。妻を失った喬生という男が七夕の晩に麗卿という美しい女性と知り合う。麗卿の供をする娘は牡丹燈を手にした。喬生は夜ごと麗卿と枕を交わすが、隣家の老人がこれを怪しみ、家を覗くと相手の女は骸骨。翌朝、喬生を連れて女の家を訪ねると家の代わり墓所があり、その傍らには牡丹燈があった。喬生は名高い法師に朱札を貰い、これを家の門口や寢床に貼れと言われる。その通りにすると女は家に入ってこなくなる。しかしある晩、酒に酔って麗卿の墓所を訪ねた喬生は死霊に取り付かれ、命を落とす——というもの。

この『牡丹燈籠』の話は日本に紹介され、寛文年間に出た『伽婢子』という本は舞台を日本に翻案、主人公の名前は萩原新之丞となっている。圓朝版の萩原新三郎という名はこれをもじったものと推察される。

また幕末に活躍した歌舞伎作者、四世・鶴屋南北の『阿国御前化粧鏡』（文化六年・一八〇九年 江戸森田座初演）には阿国御前の幽霊が若い武士と枕を交わす件があり、さらに重要な小道具として牡丹燈籠も出てくる。

『怪談牡丹燈籠』は高座での口演に十数回を費やした大長編であり、全体のストーリーは大きく二つに分かれる。

ひとつは旗本飯島家のお家騒動と、その家の下僕、孝助が親の仇を討ち、さらには飯島家を再興させる苦心譚。

もうひとつが飯島家の娘、お露が若い浪人者、萩原新三郎に恋をするがそれも叶わず病死し、魂魄が新三郎に執着するという話である。

全段を詳しく論じる余裕は無いが、今日に至るまで口演頻度が突出して高いのは、タイトルにもなっている〈牡丹燈籠〉のくだり。つまり、お露の幽霊が新三郎のもとを訪ね、彼を冥界に引き込もうとするパートである。次いで、新三郎の死に関係し、大金を得た伴蔵とお峰という夫婦が人間的な欲望から身を滅ぼすまでの物語がしばしば口演される。

今回の私の台本も、もっとも広く浸透している〈牡丹燈籠〉の件をパロディ化した。

方法としては、舞台を現代に移し、高校の映画研究会のメンバーが「牡丹燈籠」を撮影するうち、そこにお露がまぎれこみ、騒動が巻き起こるといった構成をとった。劇中劇がある、広い意味でのメタシアターの設定である。作者としては、古風な牡丹燈籠の世界（お露と新三郎の恋愛）と、この噺に固有の約束事（遠くから聞こえてくる下駄の音など）

の要素をそのままドラマに持ち込み、かつ総体としてはコメディ化をしなかったもので、それにはこの方式が有効だと思えた。

劇中劇のドラマと、外枠の物語がシンクロする構成の作品は東西にまたあるが（シンクロしない作品のほうが少ないかもしれない）、私が執筆時、思い出したのは二〇〇五年のアメリカ映画『奥さまは魔女』（ノーラ・エフロン脚本・監督）である。この映画の設定はちょっと凝ったもので、アメリカのテレビ局が『奥さまは魔女』（六〇年代に放送された、誰もが知っている魔女もののコメディ）のリメイクを企画する。魔女役には新人女優が抜擢されるが、彼女は魔界からやってきた本物の魔女で——という趣向だった。単純な六〇年代ドラマの映画化ではなく、みな知っているテレビコメディを劇中劇に据えた現代の魔女物語になっていた。このモチーフ処理はたいへん面白く、私は自分でも試してみたくなった。

ところで、高校の映画研究会が撮影をするうち、落語の世界にシンクロしていくという構成を、私は『お菊の皿』で一回、使っている（二〇一三年一月二十一日放送。明星大学人文学部日本文化学科「研究紀要第二十一号」に、落語のラジオドラマ化とその実践と方法」に台本所収）。本作は前作の直接的な続編ではなく、おなじ設定のバリエーションである。私は考えるが、タカシ、トモコ、コウスケという中心人物の人名はそのまま使用することにした。しかし、ここで不思議なことが起きた。コウスケという名前は原作に登場する忠僕「孝助」と同じであり、偶然にも「牡丹燈籠」の世界と接続されているのである。たまたまと言ってしまうまでもあるが、私には圓朝的な因縁に感じられた。

喫茶店店主の飯島の名は、原作の飯島平左衛門からとった。「冥土」に関する地口は、落語の『地獄八景』そのほかに使われる洒落

のアレンジである。冥土からの出発がフェリーであるのは、三途の川を渡るといふ地理設定を意識している。

さて、本作では語り手を主人公「タカシの一人称」に設定した。さきに記した『御神酒徳利』と反対に、こちらは男性一人称である。女性一人称は外部との「距離感」を意識化させ、また内省を語るのに適していると書いた。では、男性一人称の特徴とは何か。

作者の実感としては、男性一人称は外部を〈男性〉の内面に取り込むことに向いているので、センチメンタルな世界把握に向いている。ハードボイルド小説の一人称や映画『ブレードランナー』（封切版）のモノローグがわかりやすい事例だ。つまり、男性の視点は世界を〈自分の色〉に染めてしまうのである。これを少し違った視点から見れば、男性一人称は自分の目につつた色調を疑わないという点で、視野が狭いとも言える（こう言って悪ければ、「純真である」と言い換えてもいい）。そのため、巻き込まれ型のコメディに向いている。

本作のタカシはまさにそのようなキャラクターであり、冥土からの訪問者、お露のたくらみに巻き込まれる。お露がタカシに対してやたらと積極的なのは、作者がそのような状況が好きだと言うこともあるが、原作のお露・新三郎の関係をそのまま踏襲しているのだ。改めて、お露と乳母のおよねの動きは相当にユニークだ。

ドラマのエピローグで、トモコは「あの夜」何があったのかとタカシを問い詰めるが、この物語はタカシの一人称のみで語られており、向島での深夜の散歩も、最後の晩の部屋での顛末も、タカシの記憶にない以上、それは「覚えていない」としか言いようが無いのである。

ラジオドラマ「もう半分」

(登場人物)

- ・老人 貧しい青物商人。腰が低い。過去がありそう。(60歳)
- ・新助 もと若旦那だが、いまは煮売り酒屋の亭主。

- ・おきわ 育ちがいいので、悪事に抵抗があり煩悶する。(30歳)
- ・新助の女房。もと吉原に出ていた。精神年齢は新吉よりも上。よくもわるくも大人。(20代)

- ・乳母 年老いた乳母。(おきわと二役) (50代〜60代)
- ・赤ん坊 おきわ・新吉の子供。老人の生まれ変わり。(老人と二役)
- ・落語家 物語の語り手。ある意味で物語の外にいる。(40歳前後)

○シーン1 落語家のモノローグ

出囃子 (拍手なし)

落語家

(聴取者への直接的な語りかけ)

……えー、毎夜、毎夜 ごひいきをいただきまして、まことにありがとうございます。

いつもですと、ごく罪のない、ばかばかしいお噂を申し上げますまして、お時間を拝借するという次第ですが……。

今夜のところは、ご注文を頂きまして、例の「白鬚橋の煮売り酒屋の一件」をおはなしいたします。

この一件は、わたくしも少々、かかわりがございました、今夜は特別に申し上げますが……なにぶん、ちと奇妙な出来

事でございますから、ほかではおはなしにならないよう、お願いを申し上げます。

そう、あれは空がどんよりと曇った、秋の夜の夜更けのことでございます……。

○シーン2 夜更けの煮売り酒屋

※ この時点での客は落語家ひとり。

新助

「こちらぬる爛、お待たせをいたしました」

落語家

「おう、待った、待った。」

(飲んで) うーん、たまらないねえ。ここのお爛は、熱すぎず、ぬるすぎず、いつもちょうどいいんだ。この、おきわさんのお爛の腕があるから、どうしたってここに寄らなきゃ、うちに帰れねえという寸法だ」

おきわ

「まあ、噺家ってのは、口がうまいものだね」

落語家

「いや、これは仕事で言うんじゃねえ。本心、本心」

おきわ

「そうかい。褒められたって、なにも出やしないよ」

落語家

「いいんだよ、おきわさんの顔を見るだけで、一升は飲めるというものさ」

おきわ

「(まんざらでもなく) そう。こんな顔でよけりゃ、好きなだけごらんよ」

落語家

「へい。弁天様をおがみながら、御神酒を頂戴いたします」

おきわ

「まったく口の巧い人だね」

落語家

※ 二人、他愛なく笑う……。

……江戸の町を流れる隅田川。白鬚橋は浅草の北、吉原のすぐ近くに掛かっている橋です。

この店は、白鬚橋のたもと近くにありますが、小さな煮売り酒屋でおいてあるものは酒に、香々、簡単な煮物くらいのもので……。中のつくりは一問。四、五人も入れれば一杯でございませぬ。

店に居るのは、主人の新助とその女房、おきわの二人。

新助は、私の見たところ、もとはお店者。年格好は三十でこぼこといったところでしょうか。おきわは、吉原の遊女あがりらしく、いかにも玄人の女。

「わけあり」といった風情の夫婦です。

私は白鬚橋を渡ったところに間借りをしていましたので、寄席のつとめを終えると、帰りしな、この店によく寄っては酒で疲れをいやしたものでした。

おきわのお爛がうまいのは、べんちゃらではありません。

芸人だって、たまには本当のことを申します。

新助 「そういえば、おまえさん、仕事で成田に行くって行っていたが、もう行ってきたのかい」

老人 「いや、ちょうど明日からだ。成田の秋祭りの余興によんでもらって、むこうで三日、高座を勤めてくるのさ」

おきわ 「成田は近いと聞くけど、行ったことないね。いいところかい」

落語家 「ああ、なかなかいいところだ。立派なお不動様があって、門前町があって、それでいてのどかで。飯も酒も旨い」

おきわ 「そのうえ、きれいな女もいるんだらう」

落語家 「ばかいい。三日の間、仕事のほかは、お不動様への願掛けをして過ごすつもりでゴザイマス。なんてな……：：：そうだ、あ

のあたりは川魚の佃煮が旨いから土産に買ってこよう」

おきわ 「まあ、うれしいね。さすが真打！」

新助 「これ……すみません。遠慮のない女で」

落語家 「いや、おきわさんがこの店の値打ちだよ。しかし、言われてみりゃあ、明日は立つのがちと早いんだった。勘定をお願ひします」

新助 「毎度ありがとうございます」

……勘定をすませ、表に出ようとしたそのとき。

SE 引き戸をあける

老人 「へえ……まだよろしゅうございますか」

落語家 入れ違いに入って参りましたのが、六十格好の小さな老人で。私も、以前に二三度、見かけたような気がします。顔は渋紙色。ツギハギの当たった着物を着て、足にはくたびれた草鞋をはいています。たしか、天秤棒をかついで野菜を売って歩く、出商人でまきんどをしている人でした。

老人 「少しばかり、飲ませて頂きたいのですが」

新助 「かまわないが、今日はもう火を落としてしまったところで。そろそろ店仕舞にしようかと思っただが」

老人 「そうですか。わかりました、もうお仕舞いでしたら、また改めて……」

おきわ 「いいよ。爺さんは、特別だよ。さあ、ここにおすわりな」

老人 「ありがとうございます」

落語家 その老人は、頭をさげると、店のすみ、簡単なつくり柵がございませぬ、そのすぐ横に腰を下ろしました。

私は入れ違いに店を出ました。

そして、これが、この老人をじかに目にした、最後のことになったのです……。

※ 落語家は帰り、客は老人のみ。

老人 「お酒を（枀のはかりで）半分、お願いいたします」

新助 「（継いで）……はいよ、ちょうど半分」

老人 「いただきます……（飲んで）……ああ、うまい。この世に極楽があるとすれば、このときばかりでございませぬ。

（飲み干して）

もう半分、お願いいたします」

新助 「爺さん得意の「もう半分」がはじまったな。（継いで）はいよ。しかしな、うちはきちんと量り売りをしているから、一杯でも半分でも、結局は一緒だぜ」

老人 「（卑下して）はい、意地が汚いのでございませう。大きいので一杯、二杯と飲みますより、半分ずつ、二杯、四杯と

飲んだほうが、たとえ飲んだような気がいたします」

新助 「そうかい。まあ好きにするがいいよ」

老人 「（飲んで）こちらのお酒はいつもおいしゅうございます。辛いところに、少し甘みがさして……どうも応えられません。

はい……もう半分おねがいします」

新助 「はいよ。……なんだな、爺さん、今日は荷をかついでこなかったんだな」

老人 「（わけありで）はい……今日は仕事で出たのではありませんか
んで」

新助 「休みかい。そりゃいいな。おれもたまには骨休めをしたい

が、こうして開けときゃ、幾らかにはなるんでな」

老人 「しかし、こうして店のあるかたは、私のような商いをしておりませぬと、うらやましく思います」

新助 「店といっても。こんな掘っ立て小屋のようなところで商いをしてもしれている。もっと、ちゃんとした店を構えて、若い者でも使って商いをしてみたいとも思うが、まあ、なかなかそうもいなくなってるな」

老人 「そうですか。わたしからは、十分、しあわせなお暮らしかと思ひますが……」

新助 「……しかし、爺さんもそのトシで、天秤をあてがって出商いをするのも、骨が折れるだろうな」

老人 「はい……もうトシでございませぬ。少し重い荷をかついだ次の日など、腰がめりめりといひます。それでも、商いに出ま
せんと、日が送れませぬので。

（飲む）

あ、もう半分いただきたいのですが。お手数をおかけし
ます」

おきわ 「じいさん。これは、まかないでつくったんだけね。もしよかったらお食べよ」

老人 「ありがとうございます。これは、おいしそうなもの
な」

おきわ 「冬瓜を煮たものだよ。口に合うといひけどね」

老人 「ちょうだいを致します。（食べて）ああ、おいしゅうござ
います。柔らかいので、私のように歯が悪い者にも食べるこ
とが出来ませぬ。私どもの商売ものを、このようによく料理し

て頂きますと、冥利に尽きます。おかみさんは料理がお上手ですな」

おきわ 「あなたは、小さい頃に出て行った、わたしの親父にどこか似ているんだよ。だから、他人のような気がしなくてね」

老人 「もったいないお言葉で、おそれいります。」

(飲み干して)「ごちそうさまでございまして。お勘定は……はい……ちょうど、こちらに置かせて頂きます。」

あ……(気が変わり)……もう半分だけ、いただいてもよろしいでしょうか」

新助 「かまわないが……今夜はずいぶん飲んだな」

老人 「はい……少しばかり飲みたい気分でございます。あ、ありがとうございます。(最後の酒を飲み)はい、長居をいたしました。お鳥目はここに」

新助 「ずいぶんと冷えてきたからな。夜道で風邪をひかないように気をつけてお帰りなさい」

老人 「はい、おやすみなさい」(去る)

新助 「またおいでなさい」

SE 引き戸を開ける／北風の音

新助 「あの爺さん、今夜はずいぶん飲んでいったな」

おきわ 「懐があったかかったのかもしれないね。さあ、あんたもここにあらがって一杯おやんなよ」

新助 「そうするでしょうか……おや」

落語家 新助はさっきまで老人が座っていたあたりに目をやりますと、腰掛けのうえに、小さな風呂敷包みが置き忘れてあることに気がつきまして

新助 「こりゃいけねえ。爺さん、忘れものをしていったぜ。まだ近くにいますはずだから、ちょっと追いかけてこよう」

おきわ 「いいよお。また、明日でも明後日でも顔を出すだろうよ。そのときに渡してやりゃあ」

新助 「それもそうか。じゃあ、こっちであずかっておくことにしようか。(包みを持ち)なんだか、ずいぶんと重い包みだな。」

おきわ 「……こりゃあ、もしかすると」

落語家 金の重みというのは、ほかの荷物と手応えが違うものです。新助が包みを改めますと、中には半紙にくるんだ五十両。

新助 「こりゃあ大金だ。これだけの金、じいさん、よほど訳があるにちげえねえ。やっぱり追いかけてやろう」

おきわ 「(咄嗟に)……ちょいとお待ち！ 返すことはないよ」

新助 「なんだって」

おきわ 「おまえさん、いつもなんと言ってるんだ。こんな掘っ立て小屋のような店から抜け出して、ちゃんとした商いがしたい、若い衆の二三人も使ってみたいと、そう言ってるんじゃないか」

新助 「なに」

おきわ 「いまのように、一文二文の細かい商いをしていて、いつそんな金が貯まるんだい。……貯まるわけがないよ。ここにあら五十両を元手にすれば、その夢が叶うんだよ」

新助 「だが、これはおれたちの金じゃねえ」

おきわ 「おまえ、私が吉原で勤めに出ているとき、どんなことを言っただか、私と一緒にあったか、忘れたのかい。」

新助 おまえと一緒にあったら商いをし、楽にさせてやる。

おきわ

「こんなことなら、弟のほうを捕まえておくんだったよ。」

次兵衛は、あれでなかなかいい男だからねえ。はじめてはなすけど、わたしは店に出ている時分、二度、いや三度、相方に出たことがあったっけね。だれかと違って、いかにも甲斐性のありそうな男だったよ」

「(我慢をしていたが、激昂して) よさねえか!! いいか、おれがしているのは人の道のはなしだ。おれの考えに文句があるなら手前は今日限りこの家を出て行け。この金はそっくり爺さんに返す。必ずだ」

落語家

……人間にはさまざまな顔がございます。

「なにからなにもまだ正しいおこないをするという人もいませんし、反対に、なにからなにも悪で染まっているという人もおりません。たいていの人は、善と悪を自分の中に飼いつけながら、世の中を渡っていくのではないのでしょうか。しかし、なにかのはずみで、天秤の釣り合いが片方にずっしりと傾いたとき、人は人でなくなってしまうのかもしれない。」

○シーン3 戻ってきた老人

SE ドンドン(扉を叩く)

「おたずねします、おたずねします。ちょっとここをあけてくださいませんか」

おきわ

「なんだい、今日はもうおしまいだよ」

老人

「さきほどの八百屋でございます。おたずねがあり、戻って参りました。ここをあけてください。お願いをいたします」

おきわ

「そうかい。いま開けるからおまち」

おまえに世の中というものをみせてやる。

お伊勢様にも一緒に行こう、春になったら川遊びをしようって言ったのをわすれたのかい」

「それは、たしかにそう言った」

「その言葉を真に受けて、おまえにこの体を預けちゃみたものの。いったい、いつ、お伊勢様に連れて行ってくれたんだい。わたしは、花のさかりに、なか(吉原)にいたから、世の中というものを見たことがないんだよ。」

水がなくなつて、しおれちまう前に、ここから抜けだしたんだよ。おまえだってそうだろう」

新助

「そりゃ、そう思う。だが、あの爺さんのなり形を見てみる。おれまがった腰、ふしだらけの指、おれは涙が出てくるぜ」

おきわ

「それがどうかしたんだい。ふん。いつだって知恵の足りないやつは、ああして、損な役回りをして暮らすしかないのさ。いいかい、世の中で機転のきかないやつは下に、頭があつて運をはなさないやつは上に浮かび上がるんだ。わたしは、いやになるほど男をみてきたから、わかるんだよ」

「知ったようなことをいいやがる」

新助

「おまえさんよりは知っているさ。……だいたい、お前さんは人がよすぎるんだよ。自分の手を汚すくらい覚悟がなきや、この世でいい目が見られるものかね。……そんなことだから、おまえは長男だというのに、弟の次兵衛に商売の跡継ぎの座を横取りされちまうんだよ」

新助

「(静かに) うるせえ」

SE 扉を開ける。老人が入ってきて

老人 「夜分にすみません。さきほど、わたくし、忘れ物をいたしました。ここに、これくらい風呂敷包みがあったと思うのですが、あれはわたくしのでございます。(捜して) ええ、ここにございませんでしうか」

おきわ 「知らないね」

老人 「そんなはずはございません。あの、格子の柄の、茶色の包みでございます。あ、もしかしてご主人がお預かりくださいましたか」

新助 「(短時間の間に翻意し、しかしうしろめたく)

いや、おれも見ねえ」

老人 「そんなはずはございません、たしかにここに……」

おきわ 「きっと、ほかで忘れてきたんだよ。うちにはそんなものはじめからなかったよ」

老人 「いえ、たしかにこの店にまではもって参りました。

この棚のところに置こうかと思ったのですが、用心が悪いと思い、腰掛けにおいたのです。しかし、酒を飲むうちについてっかりと忘れてしまいました。どうぞご冗談はおやめください」

おきわ 「あたしや、冗談など生まれてこの方、言ったことがないよ」

老人 「おかみさん、それでは……」

おきわ 「おまえ、私たちが嘘を言っていると聞いたのかい」

老人 「いや、そうではございませんが……」

新助 「爺さん、その荷物の中身はなんだったんだい」

老人

「はい……実は五十両という大金でございます。これは大切な金でございまして、無くしたと言ってすむ話ではございません」

おきわ

「ナスやカボチャを売って歩くおまえには、ずいぶん不釣り合いな金だね。作り話じゃないのかい」

老人

「いいえ。……実を申しますと、私には遅くに出来た娘がひとりでございます。私の口から言うのものはばったいことですが、よく出来た娘で、遊びたいさかりの年頃ですが、そんなそぶりも見せず、わたしのことを助けてくれます。

夏のことでした。あまりの暑さに青物市場で目を廻した私を迎えにきたその晩、こんなことを言ったのです。

おとつあんも、そのトシになって、野菜を売り歩くのもうムリだ。小さくてもいいから店を構えて、すこしは楽な商いをしておくれ。その商いの元は私がつくるから……と」

新助

「どうやってつくるんだい」

老人 「はい。……吉原に年季奉公をして金を工面するから、それをもとに店を構えてくれと申します。はじめは、無用の心配だと思つたが、娘の意思はかたく、それなら、はやく商いを成功させ、年期をくりあげて、私が迎えに行くから……と約束をいたしました」

新助

「じゃあ、五十両の金は」

老人 「ついさっき、吉原の本店おきなせと取り交わしをいたしました。そのかわりに預かった金。いわば、あの金は娘を売った金でございます。どうぞ返してくださいまし」

おきわ 「そんな話を聴かされても、ないものはないんだよ」

老人 「ご主人はご存じでしょう」

新助 「いや、おれも心当たりがねえ」（うしろめたく）

老人 「（絶望して）……そうですか……」

おかみさんも、ご主人も、知らない、無かったとおっしゃる。さきほど、吉原をあとにするとき、娘は、とっつあん、おまえは酒が好きだ。その酒で道を誤ることが心配だから、どうかこの金で飲むことだけはやめておくれ」と釘を刺されました。案の定この始末。

これでは私は死ぬより他に道がありません」

おきわ 「薄気味悪い人だねえ。縁起でも無い」

新助 「（心が揺らぎ）爺さん、そんなわけがあるのなら……」

おきわ 「おまえさん、しまりをしておくれ。今日はもうおしまいだよ」

「……爺さん、力になれなくてすまねえな。今日のところは家に戻って、よく休むがいい。こっちもまた捜しておくよ」

老人 「……酒に負けた、私が悪いと思うほかありません……」

SE 北風……

落語家 北風の吹くなかを、老人はとぼとぼと歩みを進める。しばらくいくと、隅田川にかかる白鬚橋に出まして。老人は何を考えますか、じっと夜の川面を見えています。

やがて、なにかを決心した様子で、草鞋をぬぐと、そこへあわせ、両手は欄干をつかむ。老人の暗い目が何かに魅入られたようにギロリと光りまして……

SE ドボーン……（身投げをした）

新助 「おい、いまなにか聞こえなかったか」

おきわ 「聞こえない、なにも聞こえないよ」

○シーン4 夫婦の出世 一年近くのち（川遊び）

SE 夢の中のような、はなやかな音楽

SE 船をこいでいる音

おきわ 「おまえさん。夢のようだね」

新助 「ああ、まったくだ」（いまだに少しうしろめたい）

おきわ 「あれから、なにもかもトントン拍子じゃないか。あの金を元手に店を出せばすぐに繁盛をする。おまえは、いまでは若い者を三人つかう立派な親方。店のほうは職人にまかせて、こうやって遊んでいても何も困らない。」

わたしや、まえから船に乗って観音様にお参りに行ってみたいと思ってたんだ。ほら、ごらんよ、あそこに聖天様が見えるよ」

新助 「……うん」

おきわ 「なんだい、もっとうれしそうにしたっていいじゃないか。あ、あんなところで、笹屋と魚屋が喧嘩をしているよ。それを私たちは船のうえから御見物。おもしろいねえ」

新助 「おれは、この一年でずいぶんトシをとったような気がするぜ。それに引きかえ、お前はまるで娘っこだな」

おきわ 「そうさ。わたしは娘っこに戻ったんだよ。……けどね、こうしていられるのも、あと少しなんだ」

新助 「なんのことだ？」

おきわ 「私のおなかをさわっておくれ。ほら……わからないかい」

新助 「……うん」

おきわ 「……うん」

新助 「……うん」

おきわ 「……うん」

新助 「……うん」

おきわ 「……うん」

新助 「……うん」

おきわ 「……うん」

新助 「……うん」

おきわ 「……うん」

新助 「……うん」

おきわ 「……うん」

新助 「……うん」

おきわ 「……うん」

新助

「なにもないが」

おきわ

「にぶいね。私のおなかには、もう小さいのがいるんだよ。」

秋……冬には出てくると思うよ」

新助

「……そうか。じゃあ、おれも……」

おきわ

「人の親になるんだよ。だから、少しは嬉しそうにしておくれ」

落語家

……人の世の運不運というのはわからないもので。酒に飲まれて金を忘れてしまった、あの老人は隅田川に身投げ。

その隅田川で、例の金をもとに成功をした、おきわ・新助の夫婦は船遊びをしているというのですから……。

あの出来事があったあと、二人はすぐに白鬚橋近くの店をたたみまして、芝居町近くに居酒屋の店をだします。

これが当たり前。すぐさま儲けが出るようになりまして、二人は昼間から遊んでいても暮らしに困らないという身分。

そのうえ、おきわが懐妊をいたしまして。あつという間に月満ち、いよいよお産ということになりました。

SE 赤ん坊の泣き声

——しかし、人生、一寸先は闇と申します。

いや、お産そのものは軽くすんだのです。生まれたのは小さな男の子でした。ところが、お産婆さんが赤ん坊の顔をおきわにみせると、おきわは、みじかく、ぎゃっと叫ぶが最期、そのままあの世へと旅だってしまったのです。

○シーン5 赤ん坊 一ヶ月ほどのち

M 前のシーンとの変化を

乳母

「旦那様、申し訳のないことですが、こちらのおつとめは、今日限りでおいとまをいただきたく存じます」

新助

「それは困る。私は男、赤ん坊の世話はどうしていいかわからないし、店のこともしなくてはならない。給金を上げるから、もう少し勤めてはくれないか」

乳母

「いえいえ、給金のことではございません。私には、あの赤さま（赤ちゃん）は、とてもお世話をすることが出来ません」

新助

「それじゃあ、ほかの人を探すまで、五日、いや三日。それだけの間、世話をしてくれ」

乳母

「いや、なんと申したらよいか……これにはわけがございません」

新助

「わけ、いったいどんなわけが」

乳母

「言いくいことですが……あの赤さんは、生まれて間もないというのに、夜中になると、お立ちになります」

新助

「赤ん坊が立つ。そんな馬鹿な」

乳母

「本当のことでございます。それだけではございません。立ちあがって、それから……いや、とてもこれ以上はいえません。どうか、旦那様、じかにおたしかめを」

落語家

妻のおきわを失った新助は、乳母をやとって赤ん坊の世話をさせました。ところが、来る乳母、来る乳母がすぐに逃げ出してしまふのです。最後にきた乳母からこんな話をきいた新助は、今夜、赤ん坊と寝床を並べまして、夜中になにがおきるのか、自分の目でたしかめることにいたしました。

SE 寺の鐘（深夜）

赤ん坊

「おぎゃー、おぎゃー……おぎゃー……おぎゃあ……」
(だんだんゆっくりになって止まる)

落語家

寺の鐘が八つを打ちましたところでしょか。

それまで夜泣きをしていました赤ん坊が静かに泣き止みまして、目をぱちりと開きます。

そうして右、左をきよろきよると見回しますと……布団のうえにむっくりと起き上がります。

新助は薄めを開けて、様子をうかがう。

赤ん坊はそのまま、二本の足で行灯のほうへ。行灯の障子をあけますと、中の「ともし油」が入った器を両手で抱えまして、こくり、こくりと飲み始めます。

新助

「こりゃいったい、なんだ……」

新助はあまりの光景に肝をつぶしましたが、息を殺してたちあがり、赤ん坊をしかと見ます。すると、行灯のあかりに照らされた赤ん坊の顔かたち、背中の丸みまでがああ老人に生き写しという有様ですから……

新助

「(顛末を悟り)……爺い! 迷ったな!」

赤ん坊

赤ん坊はこちらを振り返り、器を差し出すと
「……へーっへへ……もう半分ください」

(このセリフは「オチ」としての意外性、滑稽味を含む)

おわり

「もう半分」創作ノート

原作は「怪談噺」風の「落とし噺」として定着をしている。

現行の落語のポイントは、煮売り酒屋夫婦、とくに亭主の煩悶と変貌にあるというのが私見である。老人が酒の誘惑に負けるのと同様、亭主も女房の存在と金の魅惑に勝てず、悪へと染まっていく。その揺れ動く人間の姿がリアルで面白い。

いま私たちが耳にしている落語は、明治時代前半から大正時代にかけて確立された「近代落語」だが、まさに落語の近代性の部分、すなわち「神なき時代」に於いて、よるべなく生きるほかない人間を、散文形式でつかまえた落語のひとつが『もう半分』だと私は考える。

『もう半分』の源流は講談の『夢と寝言の仇討ち』(別名を『正直清兵衛』)にあると推察される。講談のあらずじを引用する。「勢州清野村の住人、清兵衛は名主から神宮参拝中の領主に百両を届けるよう命じられる。また、神聖な金を廁に持ち込まぬよう注意される。彼は立ち寄った飯屋で財布を藁の中に隠し廁による。その際に飯屋の女房、お熊が財布を盗む。清兵衛はすぐに盗難に気がつきお熊を問い詰めるが、お熊の剣幕に恐れをなし、彼は店を去る。清兵衛は宮川で自殺をしようとするが、旅人に止められる」。(桃川燕林政実口演、高島政之助速記。文事堂。明治三十三年・一九〇〇年)

講談のストーリーはこのあとも続き、紛失した金の穴埋めをするため、清兵衛は娘を身売りし、百両を捻出するという展開になる。

この講談を脚色したのが歌舞伎の『敵討噂古市』(安政四年五月江戸市村座初演)である。作者は河竹黙阿弥。この作は『正直清兵衛』の通

称で知られている。あらずじを記す。「勢州窪田村に住む清兵衛は村の代表として太々識の五十両を預かる。酒癖の悪さから、使いの間は禁酒を命じられるが、その道中、居酒屋に立ち寄り飲酒する。清兵衛が財布を藁の中に隠して廁に入った隙を見て、居酒屋の女房、お瀧は五十両を石とすり替える。店を出たのち、金のないことに気が付いた清兵衛はすぐに店に戻るが、証拠が無いので泣き寝入りをするしかない」。このあとは講談と同様、清兵衛の娘が身売りをし、彼は村を去るという展開になる。(以上、講談および歌舞伎の概要、両者の関連については埋忠美沙の論文「河竹黙阿弥作『敵討噂古市』の典拠考」(『近世文藝』八三号平成一八年一月)に拠った。『敵討噂古市』の成立に関して詳細に考察した論考である)

落語の『もう半分』に関しては五代目林家正蔵の速記があり、これが現行の構成・演出の古い型であったと考えられる。題名は『正直清兵衛』となっている。明治四十年(一九〇七年)『文芸倶楽部』十三巻十号。速記者今村次郎。

あらずじを記す。「本所林町の住人で青物商いをする清兵衛は正直者で正直清兵衛と呼ばれている。ある日、同じく本所林町にある居酒屋に立ち寄り酒を飲む。彼は酒を半柄おかわりをした。彼が帰ったあと、店じまいをする居酒屋の女房が店先で財布を拾う。中には十五両の金が入っていた。女房が亭主にそれを見せると、亭主は隠してしまおうと発案する。そのうちに清兵衛が店に戻ってくる。彼は財布の中の金は娘を吉原に身売りした代金だと語るが、居酒屋夫婦は財布など知らないと言い張る。落胆した清兵衛は帰って行く。居酒屋の亭主はそれを見送るが、清兵衛が役人に訴えると面倒だと考え、出刃包丁をもって清兵衛の後を追う、彼を殺害する。その後、女房が懐妊、出産をしたが、生まれた赤

ん坊は清兵衛そっくりだった」。

比較をすると、落語の『もう半分』は講談を源流に持ちながら、酒の誘惑という重要な要素に関して、歌舞伎の影響を受けたのではないだろうか。禁酒の誓いと破棄という題材は落語がことに好むものだ。

右に上げた三つの記録と、現行の落語テキストの大きな違いは、講談、歌舞伎、正蔵の速記には、盗みをする夫婦の心理的逡巡がほとんど無いということである。講談、歌舞伎の場合は忘れ物を拾うのではなく、店の人間が意図的に窃盗する。落語『正直清兵衛』の場合は、女房は思わぬ落とし物に困惑のていを見せるが、亭主はあっさり隠すことを発案し、それに女房は何も言い返さず、行動を共にする。さらに亭主は清兵衛を追いかけて殺害をする。つまり性根が「悪人」なのである。

正蔵型の『正直清兵衛』が、どのようにして現行の『もう半分』に進化をしたのか。その過程はあきらかではないが、私はここに近代という時代の影響を見る。役柄としての悪人の行動では無く、無名の市民の煩悶と変貌——つまり個人の心がクローズアップされているのである。さらに、正蔵の速記では一回だけおかわりをするときに使われる「モウ半柄」という台詞を拡大し、オチにまでつなげた工夫も素晴らしい。(正蔵の速記にオチは無く、このあとは因果漸になることを予告して終わる)。現行のオチと結末によって、『もう半分』は講談や芝居の古風な長編物語の世界を抜け出して、一席物の独立した空間を完成させたのである。

さて、ラジオドラマの『もう半分』を執筆するにあたり、私は古今亭志ん朝と五街道雲助の口演を大いに参考にした。志ん朝のものは女房の「強さ」が印象にあり、また、全体は怪異譚ながらも、オチを含めた滑稽の味が面白かった。雲助の口演は正蔵『正直清兵衛』と現行の『もう

半分』を接合した独特のテキストであり、煮売り酒屋亭主はもと悪人なので老人を追いかけ殺害する。そのあとは現行テキストに戻り「もう半分ください」のサゲもある。腰が低く、人生に疲れた老人の人物造形の深さ、途中で冬瓜の煮物をたべる件の生活実感、オチの赤ん坊の笑い声、いずれもがすばらしい達成で、今回の台本も、とくに老人のイメージに関して多大な影響を受けた。兩名の口演は商品化（志ん朝『もう半分』はDVDボックス『古今亭志ん朝 落語研究会下』ソニー・ミュージック・ダイレクト所収。雲助『もう半分』はDVD『大師匠 第貳巻』AMGテイメント所収）もされている。

今回の台本作成にあたって、もっとも膨らませたのが、煮売り酒屋の女房のキャラクターである。通常、この人物に人名はなく、財布の扱いをどうするかという件で全面に出てくるほかは、背景に後退している。私はこの人物にボリュームを与えなかった。先に記したように、志ん朝の口演には、女性の奥底にある怖さの魅力があり（考えてみれば志ん朝は『お直し』でも『三枚起請』でも、こういうところが巧かった）、これがまずイメージの源泉になっている。

もうひとつ、北條秀司の戯曲『狐狸狐狸ばなし』に出てくる、亭主を毒殺しようとする悪女の「おきわ」にもインスパイアを受けた。人物名はそのまま借用し、また北條の戯曲で吉原の遊女あがりの女房となっている設定も、使わせて貰った。同戯曲で、おきわが情人に甘え「女は好きな男の前ではいつだって娘っ子になる」という意味のことを言う。印象に残った台詞で、これを後半の船遊びの場面で変奏した。「そうさ。わたしは娘っ子に戻ったんだよ」。

会話ではのめかされる新助とおきわの関係、商家の相続を弟に取られた設定などは今回の独創である。新助が商家の若旦那で、お人好しい

うキャラクター設定は、亭主が女房に気圧される展開に合理性を与えたいと思っている。また、こうした背景の設定によって落語の『もう半分』よりも亭主が若く、描線は細くなっていると思う。

身投げの音が夫婦に聞こえる件は今回の工夫。「距離」の写実性を無視したラジオドラマならではの演出法を導入した。

また、今回は「老人」と「赤ん坊」を同一の声優が二役兼ねた。これは生まれ変わりを示唆する表現として成功したと思う。「おきわ」と「乳母」が二役になっているのは声優手配上の現場の都合であり、これは必ずしも二役でなくても良い。

舞台となる煮売り酒屋の場所は、落語でも千住小塚原、永代橋近くなど一定しないが、私は白鬚橋近くに置いた。吉原に近いという地理的条件と、浅草以北という土地の寂しい雰囲気を与えなかったためである。芝居町は浅草猿若町を想定。その東を流れる隅田川で夫婦は船遊びをしているという設定である。

もっとも重要な語り手の位置に関して。この内容の場合は、老人、新助、おきわ、いずれもの一人称もふさわしくないと考え、三人称の語りを採用した。ただし、超越的な（無個性な）ナレーションによってストーリーを進行すると、はなしの構造があまりにも寓話的になり、落語のなまなましから速のく。そこで、今回はじめて、語り手としてドラマに「落語家」を登場させた。落語家は煮売り酒屋の客であり、かつ物語の外に位置し、聴取者にはなしを語って聴かせるという特殊な役割を背負う。彼は作中人物のひとりだが、老人や夫婦とは違う語りの階層に位置する。実感としては、この仕掛けにより、老人がいったん帰ったあとの夫婦の会話、地の語りによる高みからの予言、そのあとの顛末がとも書きやすかった。

これも作者としての実感だが、テレビの『ヒッチコック劇場』のヒッチコック、『世にも奇妙な物語』のタモリに見られるように、怪異譚には、物語の外枠を明示する「語り手」の存在がしっくりくる。落語から歌舞伎に輸入された『牡丹燈籠』や『怪談乳房榎』の上演でも、原作にない「落語家・三遊亭圓朝」の役が書き足され、観客に語りかける演出がとられることがしばしばある。奇妙なはなしの〈語りかた〉の型として、ひとつの系譜があるのではないだろうか。

放送資料

- 番組名 『青山二丁目劇場』
- 企画 株式会社 青二プロダクション
- 制作 株式会社 文化放送
- 放送時間 毎週月曜日、二〇時三〇分～二一時。文化放送より放送。

■ラジオドラマ 『御神酒徳利 苦しまぎれの猫占い』『牡丹燈籠 真夜中のヒロイン』『もう半分』

- 原作 落語
- 脚本 和田尚久
- 演出 久保速人
- 制作統括 矢代えり（文化放送）

■『御神酒徳利』二〇一四年一月二三日（月）放送

- 出演 おはや 相沢舞
- 善八 坂口哲夫

巴屋主人 塩屋浩三
おみつ 下地紫野
神様 草尾毅

■『牡丹燈籠 真夜中のヒロイン』二〇一三年八月一九（月）日放送

トモコ 須藤祐実
タカシ 赤羽根健治
コウスケ 粕谷雄太
およね 寺瀬今日子

■『もう半分』二〇一四年九月二九日（月）放送

飯島 小林通孝
新助 池水通洋
おきわ 会一太郎
落語家 金月真美
西脇保

おわりに

放送台本が関係者以外に「公開」される機会は少ない。

これは、放送台本を文学の一分野に位置づけ、保存、公開するという発想があまりなかったためであり、また、作者たちも、それをさして望んでこなかった。

放送台本は、ながらく〈現場用〉に作成され、放送が終わればそのまま破棄されてしまうものであった。映画台本、舞台戯曲などに比べても、放送台本、ことにラジオ番組の台本は散逸がいちじるしい。

二〇一四年四月一七日、国立国会図書館で、はじめてテレビ・ラジオの放送台本の公開がはじまった。一般社団法人日本放送作家協会が収集し、一般社団法人日本脚本アカイブズ推進コンソーシアムが引き継いだ台本コレクションのうち、約二七〇〇冊が一般公開されたもので、私はこれを大きな前進だと捉えている。これまで、放送台本そのものは国会図書館の収蔵対象になっていなかったのである。

放送台本は映画台本や舞台戯曲とおなじく、文学作品の一分野であり、さまざまな角度から読まれ、批評されてしかるべきだと、私はひとりの放送作家として考える。

紀要掲載にあたって、収録時に使用した台本のわずかな部分を改めた。細かな言い直しなど、収録に立ち会って気になったところである。また、台本と実際に放送された内容には異同がある。言葉を出演者の言いやすさ、言い回しに改める場合もあり、放送尺の関係で、収録後の編集作業で部分的なオミットが行われるケースもある。放送台本はスタジオのなかや放送局のロビーで、しばしば書き改められる。小説のような文学作品と違い、〈現場の都合〉によって変更の必要が生じるのだ。そのような

不安定さも含めて、私はこのジャンルを愛好している。

わたくしごとを、少々。

二〇一三年秋に氏名が「和田尚久」に変わりました。わたくしは子供の頃、和田という名字だったので、その後、松本家に養子に入り、松本尚久の氏名を称していました。このたび、色々あって、もとの和田尚久に戻ったというわけです。

明星大学人文学部日本文化学科の研究紀要には、第十九号に「落語『宮戸川』の後半にかくされた趣向について」を、第二十一号に「落語のラジオドラマ化——その実践と方法」を松本尚久名義で寄稿しています。とくに第二十一号と今回の論文は姉妹編なのですが、発表者の氏名が違っているのはこのような理由によります。

二〇〇八年にはじまった明星大学での非常勤講師を、個人的な都合によりまして、本年度限りで退くことになりました。大学関係者のみなさま、ことに、アカデミズムとは無関係の私を起用し、いつも様々なご配慮を見せてくださいました田村良平先生に御礼申し上げます。そして、講義といえるかどうかともわからない私のはなしにお付き合いいただいた学生のみなさまに深く感謝いたします。

和田尚久

シナリオの無断上演を禁ず。上演希望の場合は作者に連絡を願います。
Kasumi6128@hotmail.com